

「生きる」—難民移住者

いいじゃないか、お年寄りが憩う教会

「歳を取るのはいいことですよ。いろんなことが分かってくるから。」

歳なんて取りたくないと思いた私の友に、カルメル修道会の中川博道神父が仰った言葉です。私も今になって「あの時のあれはそういうことだったのか」と分かる瞬間が増えたように思います。図太くなるというか、少しいことには動じない鈍感力がつくのも歳を重ねる者の強みです。

各地区の社会活動委員会に参加すると「年寄りばかりで教会の担い手がいない」との声が必ず聞かれます。確かに青少年の姿が見

えないのは寂しいですが、人生を長く歩んできた人たち集まりには、静かな豊

の面会ボランティアに行ったり、80代のシスターが通訳に東奔西走したり、70代のシスターは「若手」でペーパーの現役扱いの修道会も多くあり。先日



かさど人を受容する優しさがあります。「私は体が動きませんがあなたの身の安全を祈っていますよ」と声

セレント。ただ、良いことばかりではありません。私は時々学習会などに呼ばれて壇上で

をかけてもらおうと肩の力が抜けます。特に元気なのは女子修道会の姉妹方です。90代のシスターがデモ行進に参加したり入管

を制するに苦労します。ある団体に呼ばれた時もそうでした。後から主催者が「どこにでもいますでしょ、ああいう方。私たちは、教えたおじさん」って呼んでますの」と笑っていました。

鼻息の荒い若者だった頃は、私によく父に口ごたえをしたものでしたが、ある時、そんな私に父が言いました。「老人の照らす光は冷たい、でも道を照らすよ。」

話す機会があるのですが、質疑の時間になると決まって手を挙げ、私への質問ではなく、自分の知識を語る人がいるのです。何分でも途切れずに話すので司会者が制するに苦労します。ある団体に呼ばれた時もそうでした。後から主催者が「どこにでもいますでしょ、ああいう方。私たちは、教えたおじさん」って呼んでますの」と笑っていました。

訃報

Sr エレナ工藤道子(援助修道会)は、2022年12月19日、心不全のため神戸労災病院にて帰天。92歳。東京都出身。奉獻生活63年。



神戸六甲教会にて受洗。1959年初誓願後、修道会運営の児童館(神戸)、女子寮寮長(東京)、老人ホーム施設長(北九州)などで使徒職に従事し、修道院内では管区会計はじめ地区共同体の会計係の派遣を受け、奉獻生活のどの時代でも会計とのかかわりの中で献身した。誠実で慎ましかな人柄で、教会へ友達を呼び集め、みことばを宣教した。



2005年より仁川本部修道院での生活となり、主に会計を手伝いながら、その傍ら趣味の手芸を活かし小物を作り姉妹や来訪者を喜ばせた。読書好きでその恵みを分かち合い、文通によって宣教に励んだ。

「すべてに感謝」の言葉を携えて安らかに御父の御許に旅立った。

ヨセフ阿部眞理修道士(聖パウロ修道会)は、2023年1月16日、膵臓がんのため静養先(福島市内)の自宅にて帰天。64歳。福島市出身。



1946年小林聖心女子学院にて受洗、57年に入会。フランスで修練を受け、59年に初誓願を宣立。帰国後、箕面の学院に勤務、64年に終生誓願宣立以降も会の教育施設で宗教教育を担当し、園長も務めた。94年から9年間は管区会計も担った。

1971年、聖パウロ修道会福岡修道院に入会。79年に初誓願、85年に終生誓願を宣立。87年9月、箕面修道院が落成し、この修道院で普及の使徒職に従事した。大阪教区はもとより、京都、広島、高松教区などの教会、修道院、学校、医療施設などを回り、出版物、聖品、視聴覚製品の販売促進に務めた。2000年5月から7年間、サンパウロ東京店に勤務したが、08年1月から箕面修道院に異動し、院長やサンパウロ大阪支部の責任者を務めた。21年夏にがん治療を始めてからも、教会などへの普及活動を継続した。多くの人と接することを喜びとし、ミッションスクール

カリスト・スイニー神父(フランシスコ会)は、2022年12月30日、慢性心不全のため東京・虎の門病院にて帰天。94才。アメリカ・ニューヨーク州出身。



1953年司祭叙階。56年来日。教皇大使館勤務の後、東京聖ヨゼフ修道院、東京瀬田修道院、前橋教会(群馬)、上田教会(長野)、軽井沢の日向修道院(リイティロ)、大阪生野教会などでの司牧や修道会の要職を担った。特にフランスシスコ会日本聖殉教者管区ができる前の連合会長を務め、日本管区設立に尽力した。晩年はフランシスカンチャ



加古川教会にて受洗。1961年の初誓願宣立後、本会各地の児童養護、乳児院、病院、障害者支援施設において会計、書記を歴任。多くの人ととの関わりの中で、あらゆる「いのちへの奉仕」によって神様の愛を証した。

2005年より仁川本部修道院での生活となり、主に会計を手伝いながら、その傍ら趣味の手芸を活かし小物を作り姉妹や来訪者を喜ばせた。読書好きでその恵みを分かち合い、文通によって宣教に励んだ。

「カテキズムの学び」第39回 第2編 「キリストの神秘を祝う」開始

2019年6月に始まったカテキズムを学ぶ信仰養成講座は、第2編の典礼、中でも七つの秘跡という信者にとって身近なテーマに入りました。1月26日に行われた第1回目の様子は上のQRコードから視聴できます。

そもそも典礼とは何かという点について、カテキズムはこう説明しています。

教会が典礼において告知らせ祝うのは、キリストの過越の神秘です。……典礼祭儀はすべて、祭司キリストとそのからだである教会のわざなのですから、他に卓越した聖なる行為であって、その効果に対して、教会の他のいかなる活動にも、同等の理由や程度でこれに匹敵するものはありません(1068、1070番)

過越の神秘とは、キリストによる救いのわざのことです。私達は典礼祭儀を通してその救いに与ることができます。「典礼は教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る源泉」(1074番)なのです。なぜなら、「キリストは、つねにご自分の教会とともにおられ、とくに典礼行為に現存しておられ」(1088番)るからです。

典礼におけるキリストの現存は、各秘跡における現存ですが、会衆の中にもキリストは現存しています。その根拠は「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいる」(マタイ18・20)」というイエス様自身の約束です。

質疑応答で、「では一人でいる場合はキリストは現存しないのですか」という質問がありました。聖書のこの場面は「あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる」(同19)とされている箇所が続きますから、複数で集まって祈ることの大切さを強調されているのでしょう。とはいえ、一人でいるときにはイエス様がいてくださらないというわけではありません。コリントで宣教中のパウロに向かってイエス様は「恐れるな。……わたしがあなたと共にいる」(使徒言行録18・9-10)と励ましておられます。

(文 酒井俊弘補佐司教)